いわゆる天蓋についての再検討

―仏教美術における華蓋を中心にして―

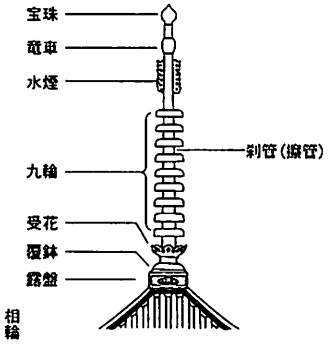
仲　嶺　真　信

はじめに

インドにおいてはチャットラ（Chatra）と呼ばれるストゥーパ（仏塔）頂部に安置される傘蓋、あるいは日本の場合のいわゆる天蓋も、それが常に仏陀を象徴するものや仏像の頭上にあり、その表現法から、華蓋、寶蓋とも呼ばれることがある。これらの「蓋」と呼称されるものは、いずれも仏の徳を賛嘆、あるいは威信を象徴する役割を担っている。

このストゥーパの傘蓋は、小杉一雄氏によれば、中国では古くから銅盤あるいは承露金盤（露盤）と呼ばれ、結果的に露盤はやがて相輪とも称せられ、それが日本では九輪へと推移していったものと考えられている*1（挿図１参照）。

ちなみに、中村元・久野健監修『仏教美術事典』も「傘蓋」の欄で小杉氏と同様のことを述べている。



挿図１ 仏塔相輪部分名称

すなわち「（前略）小乗経典には、起塔の際に供養される者の修行の階位により、傘蓋の重数が異なることを述べたものもある。中国では、傘蓋をその形状から神仙思想の承露金盤、露盤、あるいは相輪、輪相などと称した。時代が降りるとともに傘蓋本来の意味は次第に形骸化し、実際に傘から輪へと形を変えたものが中央アジア以東において現れる。わが国の九輪がこれにあたる*2」と記す。

ただし、筆者は下線部については、直ちには首肯し難いと考える。特に「傘蓋が次第に形骸化し傘から輪へと形を変えた」と述べているが、形骸化の過程で生じた傘から輪への推移の問題については、いくぶん慎重に考える必要がある。なぜなら、法隆寺五重塔相輪の円輪の具体的形状を観察した上でその問題について再考するならば、単純に傘から輪への変化というような見解は、かなり性急過ぎると思われるからである。つまり、法隆寺五重塔相輪の形状（図版１）が、八葉蓮華形を示している事実について、どのように考えるかが問われている訳である。このことに関して筆者は、詳しくは後述するが、簡潔に述べれば傘蓋と蓮華の融合化(一体化)によって、一段と強く仏陀の聖性と威徳の象徴としての意味が統合化され、それを顕在化させたものであり、決して単純に形骸化したものではないと考えている。

ちなみに仏教美術において、蓮華と傘蓋の問題を検討する上できわめて興味深い例として、ガンダーラのローリヤーン・タンガイ出土（カルカッタ博物館蔵、３-４世紀）奉献塔を挙げることができる。すなわちその伏鉢部をはじめとして、その傘蓋内部と傘蓋の支柱（傘竿）にも蓮華装飾が付随している（図版２）*3。これは後述するようにインド的・仏教的華蓋とみることができよう。

興味深いことに岩波『仏教辞典』が、「天蓋」の項目を設けて傘蓋と天蓋の関係について次のように触れている。すなわち「仏像の頭上に懸け吊られる笠状の装飾。もとは熱帯国インドで、王侯貴人の外出に際して、従者がさしかける日傘に起源する。インドにおいて仏像の天蓋と結びつき、傘蓋の意匠が仏の力を象徴する大蓮華の意匠と一体化した。この形式が中央アジアを経て中国に、さらに日本まで伝わった（後略）*4」と述べている。

このような傘蓋と蓮華の一体化（融合化）に関することが後掲の『大無量寿経』や『大宝積経』などに見えている。つまり「諸菩薩の散華が化して華蓋となる」ことが示されており、蓮華と蓋の緊密な関係が窺える*5。したがって、この傘蓋と相輪（九輪）との関連については、蓮華に焦点を当てながらもう少し丁寧に見ていく必要がある。ちなみにアジャンター石窟前期窟である第10窟（前１世紀前半頃）の天井空間において、仏塔傘蓋部を囲繞する格天井の各格間には重弁の蓮華装飾と仏像の壁画が数点確認される。この作例は、傘蓋と蓮華との関係から天蓋を考える際には看過できない。ただしこの壁画は、隣接する格間の仏像と共存することから、後期（後５-６世紀頃）に入って加筆されたものと推測される（図版３）。

ところで先述の日本の仏塔頂部のいわゆる相輪部に関して、さらに立ち入って見るならば、仏塔頂部の変化は、単純に露盤→相輪→九輪へという推移のプロセスだけではなさそうである。例えば室生寺五重塔最上部を見てみよう（図版４）。塔頂部は第五層目屋蓋から天に向かう順に露盤、伏鉢、請花、九輪、宝瓶、風鐸、宝蓋、竜車、宝珠が縦一直に連なっている。つまり注目すべき点は、明瞭に九輪と宝蓋（天蓋）とに分けて造作されていることである（平安期建立の塔は鎌倉期に修造）*6。この点において、天平期創建以来数度の修復を経てはいるものの、法隆寺夢殿（八角円堂）露盤最上部に宝瓶と天蓋を組み合わせて「宝形」を設置していることは注目に値する*7（図版５）。参考までに、このように夢殿の場合とほぼ近似する作例は、敦煌西千仏洞第18窟・窟頂南面の「説法図と千仏」（唐、図版６）の八角形天蓋頂部にも確認されることを指摘しておく。

ともかく以下筆者は、このような視点に立って天蓋について考察する訳であるが、その前にとりわけ華蓋の意味、及び華蓋と蓮華との関連について、いくつかの具体的作例を示しながら考えて見ることにする。

Ⅰ　華蓋の意味及び華蓋と蓮華との関連

林巳奈夫氏によると、中国における蓮の華の造形は仏教伝来（後漢）以前の春秋期に最古例と見られるものが検出されるが、三世紀末頃には光り輝くものとして蓮の華を天井に飾ったことが判明する。すなわち林氏は、天の中央の星座群を代表する天極星の中の一番明るい星が蓮の華で象徴されているが、この蓮は太一（最高位の天神）＝天帝を表すきわめて重要な華であったと述べ、また天帝としての蓮の華が、日月と共に示されたり、天帝の象徴である蓮の華に龍が随伴するように両者がきわめて密接な結びつきをもつことを指摘している。その中でとりわけ林氏が考古資料として挙げた岡山県苫田郡鏡野町観音山古墳出土（３世紀前半頃、図版７）の平縁半円方形帯神獣画像鏡は注目に値する。すなわち三頭の龍の引く雲車に乗る神の頭上に翳される蓋の形状が、花弁の先端を外に少し反らした蓮の華を伏せた形に作られている。林氏はこれこそ中国古来の蓮の華を象った蓋＝華蓋に相違ないと言及している*8。このように中国における華蓋の作例はかなり古くから確認されることが分かる。

ところで小杉一雄氏は、このような中国古来の華蓋を仏像の安置に用いた例の初見について、『後漢書』桓帝紀の延熹九（166）年の「庚午、祠黄老於濯竜宮」という記事の巻末の論の中で『東観漢記』によってさらに補足された箇所、すなわち「考濯竜之宮、設華蓋以祠浮図老子」に言及し、濯竜宮を考（成）して祠ったのは、黄帝や老子ばかりでなく、浮図（仏）も同じく祠ったということを証明した*9。小杉氏がここで述べる華蓋は、中国古来の神仙道的な性質を帯びた「登僊」に関わるものをさす。さらに小杉氏は続けて次のように述べている。

つまり「華蓋は（中略）本来は実用の車蓋などから出発し、当初は一重であったものが、権威の象徴となり、神仙の座の荘厳に用いられるようになって九重、十二重と層を増していったのである。つまり華蓋の使用はいわば中国固有の古い習俗として発達し、ゆくりなくも仏教東漸を迎えることになったものと考えられる。つまり桓帝が濯竜宮に於て黄老と並祀した仏像の頭上に掲げた華蓋は、本来は黄老にのみ掲げられるべきものを、新来の仏像にもとりあえず掲げたものと考えられるのである*10」と。以上が中国古来の華蓋を考える際の重要な問題であり、一方においてこのことを忘れてはならない。

ちなみに、華蓋には中国古来とインド伝来のものがあることは先述した通りである。仏教美術における天蓋にいて具体的に詳論する前に、ここでもう少し中国の古来の伝統や神仙観に基づく「華蓋」について考えてみよう。例えば白川静氏によると「翳は説文に華蓋なりとあり、車の羽蓋をいう字とする。（中略）羽には呪的な力があって邪悪を祓うとされたからであり、それで羽を居室のふすま飾りとすることもある。天子の車蓋に翳を用い、喪車には翣を用いた（後略）*11」という。ちなみに翳は「鳥の羽で飾った日よけのことであり、また鳥の名、鳳凰の類*12」をも示す。あるいは、三段式神仙鏡の最上部にある天皇大帝の頭上に翳された蓋は、翡翠の羽で出来た傘蓋であり、これを華蓋とも呼んでいるが、その支持軸（柄＝竿）は亀甲上に建てる（図版８）。この意味について、祖布川寛氏は、中国における蓋と神仙思想との関連から次のよ

うに言及している。つまり孔雀・翡翠・瑞鳥などの羽でもって（華）蓋が作られるが、この華蓋を建てる意味は、仙人の世界に登ること（登僊）を示すものと指摘している*13。

すでに中国固有の習俗に基づくこの「華蓋」を仏像安置に用いた初例について、小杉氏が指摘したことは紹介した。すなわち、仏・道の両教においても華蓋を用いて尊像を祠ることが存在した訳であり、まさに両者における共有性もしくは近似性が確認されたということになる*14。

ところで、次に仏教における傘蓋と蓮華の関連について見て行くことにする。最初に蓮華と相輪が密接に関連する問題について触れてみよう。

この類例として、日本ではすでに玉虫厨子宮殿背面霊鷲山浄土図中の霊鷲山頂上の３基の宝塔が挙げられる（図版９）。すなわち、中央塔とその左右の両塔、それぞれに蓮華形の相輪が金色に輝く様で据えられているが、中央が三重、左右が五重の蓮華形の相輪である。まさに蓮華と相輪の一体化というべき作例である。さらにこのような類例は、かつては創建期の法隆寺五重塔（九輪は12世紀半ば頃改鋳）においても実現されていたものと推測される。すなわち図のように九輪の輪自体のそれぞれが、れっきとした八葉蓮華形（図版１参照）を示しており、まさに天蓋としての相輪が蓮華形そのもので成り立っていることが分かる。この他に法隆寺の作例を挙げるならば、いわゆる天蓋が蓮華の姿を基本として形成されるものが、法隆寺金堂壁画においても数例検出される（第１・２・６・９･10号壁など。図版10）。なおもっと立ち入って指摘するならば、早くも４-５世紀半の中国において、仏像の頭上に差し掛けられ仏像と一体化した傘蓋（天蓋）の例が確認される。すなわち蓋は八葉蓮華の形状、まさに蓮華の傘蓋が翳されているが、この様子はまさに「華蓋」と呼ぶべき姿を示している（図版11）。以下このような蓮華装飾をモティーフとする天蓋のことを華蓋と呼ぶことにする。

ともあれ、このように仏像の頭上に翳す形式の、蓮華をモティーフとする傘蓋の系譜は、すでにインドにおいてはマトゥーラ・バラ比丘奉献仏（カニシュカ王３年銘：２世紀）に付随する傘蓋にその淵源を求めることが出来る（図版12）。すなわち24弁と推測される蓮華を円輪の中心部に据え、さらにその周縁部の12方位の位置にそれぞれ吉祥文や有翼獣（獅子？）が配置されていることも確認される。もっともこの円輪の傘蓋の中心に相応する部分は石材製の支柱（竿）によって支えられていた。まさにこれは吉祥のシンボルである聖なる蓮華をモティーフにしたインド的・仏教的「華蓋」の祖型とでも呼ぶべき作例と言うことができる。

一方日本では華蓋の類例は、例えば東大寺法華堂格天井に見られる蓮華と宝相華との合成によって形成される天蓋に求められる（図版13）。かつてこの天蓋について、飯田須賀斯氏は「倒蓮華」と指摘したが*15、筆者は程後本論において詳しく述べるように、この作例の場合は「蓮華と宝相華の合成による華蓋であり、また同時に仏像の頭上に翳す蓋、すなわち天蓋でもある」と考えている。無論その状態は、飯田氏の指摘した「倒蓮華」であることを否定しない。よって以下筆者は華蓋＝天蓋という立場で拙論を展開したいと考えている。

Ⅱ　華蓋即天蓋として

ところで蓮華文は、蓮（ハス）の華を意匠化した植物文様と考えられるが、古来中国にはハスの華と天とを結びつける思想が存在したことも看過出来ない。すなわち、ハスの華は天の中心（太一＝天帝）を象徴したものであり、光り輝くことを表現している*16。同様に仏教世界においても、蓮華は吉村怜氏の指摘するように「生命の華であり同時に太陽のように輝く光明の象徴」であったことを想起すれば、まさに共通の意味を持つことになる*17。今はそのことのみを指摘し、その深い関連についてはさらなる検討が必要であるのでここではあえて立ち入ることはしない。したがって、広く「華蓋」と呼ぶ場合は、中国古来の習俗に基づく華蓋が存在することも一方において認識しておく必要がある。しかし、以下の拙論においては、主に仏教の立場から華蓋（天蓋）について触れていくことにする。よって以下拙論では華蓋といえば、この蓮華装飾をモティーフとする仏教美術上の天蓋を示すことにする。さっそくその類例を以下に紹介しよう。

例えば法隆寺金堂外陣第６号壁画の場合、円形の傘形のその内側の中心部（花心部）に蓮華がついており、いわゆる円蓋を形成している（図版10参照）。このように仏陀の頭上の虚空（天）にあって、その仏陀を守護し荘厳するための装置として機能し、かつその装飾の中心部に蓮華を採用した覆い（蓋）について、既に筆者は華蓋と定義した。これは換言すれば、虚空（天）にあって、仏像（尊像）もしくは仏陀の象徴（舎利・塔）の真上を覆う役目を担う蓋（かさ）のことを「天蓋」と呼び、その蓋の中心部に蓮華を装着するものについて「華蓋」と称することになる。

さてこの華蓋について、例えば『大無量寿経　下』に見える「繒蓋・華蓋」の場面において、以下のように記述される。すなわち、

「仏、阿難に告げたまはく。彼の国の菩薩、仏の威神を承けて、一食の頃（あいだ）に、十方無量の世界に往詣して、諸仏世尊を恭敬し供養したてまつらん。心の所念に随ひて、華香・伎楽・繒蓋・幢旛、無数無量の供養の具、自然に化生して、念に応じて即ち至る。珍妙殊特にして、世の所有に非ず。輒（すなわ）ち以て諸仏・菩薩・声聞大衆の奉散す。虚空の中に在りて、化して華蓋と成る。光色昱爍（いくしゃく）して香華普く薫ず。其の華周円四百里なるものあり。是の如く転た倍して、乃ち三千大千世界に覆へり。其の前後に随ひて次を以て化没す。其の諸の菩薩・僉然として欣悦し、虚空の中に於て、共に天楽を奏し、微妙の音を以て、仏徳を歌歎し、経法を聴受して、歓喜無量なり*18」と、まさに後述する興福寺北円堂天蓋を彷彿とさせるような場面表現である。

つまり、散らされた華は、空中で華蓋と化し、金色に照り輝き、薫香は天地に漂っている。華蓋は周囲が四百里のものも、無辺の三千大千世界を覆うものもある。その華蓋は、各々相前後して生まれかつ消えていく。このような状況で示される華蓋であるが、「無数無量の供養の具が自然に化生する中、虚空の中に在りて、化して華蓋（けがい）と成る*19」という、まさに仏教特有の

摩訶不思議な蓋ということができる。なお「繒蓋」の表記に見える「繒(そう、ぞう)」とは、仏殿にかける絹の天蓋を示し「絹蓋」のことである*20。

ともあれ仏教においては、傘蓋・天蓋・華蓋・宝蓋等と表記が多種多様であるが、いずれも「蓋」の多様なあり方を示した語である。

さて関根俊一氏によれば、天蓋の基本形は傘蓋にあるが、天蓋はおよそ以下のように3種類に分けられる。すなわち（1）箱形・（2）華形・（3）傘形の3類型*21の天蓋となるが、この傘形の場合、さらに細分すれば六角形・八角形（円形）などの多角形に分類できる。

なおこの分類について少し補足すると、上記3分類以外に①雲蓋　②龍蓋　③樹葉蓋などの作例も散見されることを指摘しておく。

本論に入る前にここでまず箱形天蓋に関する先学の卓見を紹介しておこう。かつて小杉一雄氏は「天蓋即天井説は諸橋氏の説」であると指摘し、いみじくも次のように言及した。すなわち「もともと箱形天蓋は宮殿ともいえる牀帳の屋蓋部であり、その天井部分は藻井を模したものである。従ってそのような牀帳系仏座の柱を取り除いたものが伝法堂天蓋ということになる。この限りでは伝法堂天蓋は天井の代用といえないこともない。しかし大切なのは結論ではなく経過なのである。箱形天蓋は直接に大建築の天井から導かれたわけではなく、牀帳→牀帳系仏座そして箱形天蓋という過程による、ということを明らかにすることが美術史の研究には大切であることを忘れてはなるまい*22」と。まさに美術史研究の真骨頂が遺憾なく発揮されている言説である（下線部は仲嶺加筆）。

ちなみに法隆寺金堂釈迦像付随の天蓋（7世紀）や橘夫人厨子（阿弥陀三尊像安置、8世紀初）屋蓋内部にもいわゆる藻井部が検出されるが、その組み入れ天井状には数多くの蓮華装飾が「倒蓮華」の形態でもって、まさしく照明の如く煌々として表現されている*23（図版14）。その遍照の光明のもとに釈迦仏あるいは阿弥陀仏が、威儀を正し端座している。とりわけ後者の発する聖なる光明は、浄土の蓮池から延びた生命力溢れる同根三茎の蓮華座に坐す阿弥陀三尊像に無量無辺に降り注いでいる。同時にその蓮池は生き生きとし、繊細で華麗な波形曲線と豊饒な姿の蓮華をもって見事に荘厳されている。ここには天上と地中から現出する蓮華の清浄なる光明をもって、阿弥陀三尊を恭敬供養する厚い信仰心が窺われる。阿弥陀仏は無量光仏とも呼ばれたように、正しくここには無限の光、すなわち無量光仏が厳存する感覚が宿る。

以上の荘厳例に見られるように、蓮華装飾は、いわゆる浄土を現出させる極めて重要な意味と機能を担っている。

Ⅲ　天蓋の多様な表現方法

先述のようにいわゆる典型的な天蓋は、箱形・華形・傘形の３類型に分けることが出来たが、ここでまずはじめに、その類例をいくつか紹介しながら述べて行くことにする。まずは最初に仏塔の相輪・柄付き天蓋・箱形天蓋が一図の中で一覧できる作例から始めよう。

１．相輪・傘蓋・箱形天蓋

相輪・傘蓋・頂肩輿（箱形天蓋と屋蓋部が共通）を同一画面に描く作例

敦煌　初唐　第323窟（図版15）

この作例において、相輪（傘形＝円輪形）・傘蓋（傘形＝差し蓋）・箱形天蓋と解釈できる例の三例が同時に表現されおり、三者の関連が具体的に描かれている。いずれもその頂部に宝珠を安置しているが、蓮華の意匠との密接な関係が窺えることに注目したい。図左下は頂肩輿に乗る一人の僧侶（迎帝法師入朝時）、輿は牀帳の屋蓋部を持つ。輿は牀帳系仏座と解釈できるが、その四方の柱を取り除いたら即座に天蓋に早変わりする。図の右下には傘竿（軸＝柄付きの傘蓋（繖）を差し掛けられた隋文帝が、曇延法師に対面し相互に合掌礼拝する光景が見られる。帝は臣下を従者とする。また図の上部には三日三夜神光を放ったという舎利塔が見える。塔全体の最下部に蓮華座が据えられ、その上に法隆寺金堂釈迦三尊像台座と同様の宣字座、さらにその上に舎利塔が安置される。なお、いわゆる伏鉢部に蓮華座を据え、その上に受花形を配し、そこから真上に徐々に小さくなる５段の傘蓋が付くが、その平面の形状は輪相（円輪形）を示すものと推測される。図は降雨を祈願し慈雨を得るという場面である[*24]。

この図に見える三例は、その他の天空に止まるか、もしくは天井に吊られる天蓋の例を含めて総合的に考えた場合、およそ天蓋の典型的形態と見ることができる。いま試みに前者の三例を分析すれば、①不動の塔の相輪部としての傘蓋（円輪形）、②担がれた輿に乗る人物頭上を覆う箱形天蓋（可動型、方形）、歩む帝王の頭上に翳す柄付き傘蓋（可動型、円形）に分類できる。この中の頂肩輿の屋蓋部が、いわゆる法隆寺金堂天蓋及び橘夫人厨子屋蓋部と極めて類似する点は注目すべきである。すなわち、そこでは牀帳系仏座の四隅に柱が立つが、屋蓋部にまさに法隆寺金堂釈迦像付随の天蓋と同様の形式（図版16）と考えられる。

なお、相輪を数重（三重）に重ねた円形の傘蓋を菩薩が捧持する作例が、敦煌石窟将来の唐代の画像に検出される。すなわち、文殊師利菩薩・普賢菩薩両尊の頭上にもそれぞれに随伴する天蓋が見られるが、さらに両尊に随従しつつ、それらを守護し荘厳する役目の菩薩群が、三段重ねの傘蓋を捧持している（図版17）。天蓋及び傘蓋それぞれの最頂部には蓮華座上の宝珠が安置されている。とりわけ傘蓋は、あたかも仏塔の相輪部の九輪のように重層を成している

2．箱形天蓋

敦煌　隋時代420窟における「群獣聴法図法華経変」（図版18）

この窟の窟頂の中央は典型的ないわゆる絵画化（平面化）した藻井であり、その中心に大蓮華を据えている。大蓮華の周りには、三重の三角持ち送り式の構造が見られるが、その三角の間には飛天と怪獣を交互に描く。最外周には縁飾りとして、三角垂飾を配し、豪華な天蓋をかたどっている。東西南北の四披は、法華経「序品」「譬喩品」「観音普門品」に題材をとっている*25。

図は宝座上で法を講ずる仏を示している。細見すれば、いわゆる宣字座上に据えられた牀帳系仏座が見えるが、そこに坐す仏陀の頭上の覆いは、その四隅の柱を取り払えば、正しく箱形天蓋となる。担ぎ手によって移動できる頂肩輿と違い、こちらはどっしりと平面に固定して据えられた台座である。法隆寺金堂釈迦三尊像に代表される台座は、まさにこの形式の典型的な宣字座であり、その座に安置された仏像の頭上を箱（方）形天蓋が覆っていることは、両者に密接な関連性が潜んでいることを示す。まさに隋様式が、法隆寺金堂の台座と天蓋にも色濃く反映されていることが分かる。

3．円形と箱形の天蓋

前掲の「敦煌　初唐第323窟」の差し傘は、その形状からおそらく円形の傘蓋（円蓋）と推測される。一方雲岡第9窟の南壁東側にみられる作例は（図版19）、箱形の差し蓋（柄付き箱形天蓋）と考えることができる。すなわち柄付き（差し）蓋は、その形状が円と箱（方）の両形が存在するが、また同時にその逆の、柄無しの円・方の両形の蓋が存在することにもなる。後者の代表的作例は、平安期の平等院鳳凰堂の豪華な天蓋である。すなわち外側の方蓋（箱形）とその内側中心部に据えられた蓮華文と宝相華文を同時に合わせ持つ円蓋の二種類で構成されている（図版20）。さらに同様に平安期の中尊寺・法界寺の両阿弥陀堂天井にも蓮華文と宝相華との複合した意匠の円蓋が見られる（清衡堕天蓋：図版21）。

4．多角形の天蓋　六角形・八角形（円形）

A　六角形

1）法隆寺聖霊院中央厨子内・聖徳太子頭上の天蓋（懸蓋）

保安二（1121）年開眼供養になる聖徳太子肖像（桧材・寄木造）の頭上を荘厳するもので、その輪郭は六角形の天蓋を示し、その外側頂部には蓮華座上の宝珠を安置する。また天蓋内側中央の蓮華は六葉（木製）であり、さらに蓮肉部には銅製六稜鏡を付けており、まさしく神々しく光輝く天蓋を意図していることが明白である。太子像は、巾子冠（こじかん）を戴き、胸前で笏を執る形式である。その体内からは、明治38年の修理の際に、蓬莱山上で宝珠を両手で捧持する金銅製観音立像（天平期）を安置することが確認され、一方『太子伝私記』によれば法華・勝鬘・維摩の三教を奉籠したことが知られる*26。（図版22）

B　八角形

1）炳霊寺石窟169窟　西秦（鮮卑：385-431）傘竿付き（図版23）

図の傘蓋正面に明らかに五稜の縁が確認されるが、おそらく八稜形の傘蓋であるものと推測される。この図においては、傘蓋を支持する軸となる傘竿は確認されない。しかし、石家荘出土の五胡十六国金銅仏の例のように傘竿があるものと見なすことも可能である。もしあるとすれば、光背頂部に隠れて傘竿は見えないということになろう。いずれにしてもこの傘蓋の八稜形は、八葉蓮華との関連があるものと推測される。ちなみに敦煌石窟第311窟（隋）の天蓋（図版24）は、その形状から八稜形と推測されるが、天蓋頂部に蓮華形及びいわゆる宝蓋・宝珠部などが明らかに確認される。よって八稜形と蓮華形との共存関係から、上記の炳霊寺の例も天蓋の形態が八葉蓮華と無縁ではなく、むしろ緊密な関係にあるものと推測される。なお宝蓋を伴う天蓋の作例に次のものが挙げられる。①西千仏洞第18窟・窟頂南面説法図と千仏（唐・図版6参照）　②敦煌西千仏洞第18窟南壁西側・不空羂索観音（唐・図版25）。

2）金銅仏五胡十六国（4世紀）石家荘北宋村出土　河北省博物館蔵（図版11図参照）

如来坐像の光背頂部に傘竿付き傘蓋が確認される。小杉氏は傘蓋か華蓋と思われるものとしながらも、武氏祠画像や天子行列図などの華蓋に似ていることから、あるいは中国系華蓋かも知れないと指摘している*27。なお円蓋の縁には軒穴（正面に4ヶ所、全体で8ヶ所と推測）が確認され、垂れ飾りが付いていた痕跡が判明する。このような類例は、例えばガンダーラ出土の5-7世紀頃のストゥーパ型舎利容器において、それに付随する円形の傘蓋の縁にも垂れ飾りの穴と見られる痕跡が検出される（図26）。

以上の事からこの天蓋は一見円形と見えるが、それを真上から見れば、明らかに魚々子状の列点文で縁取られた連弁形の痕跡が確認され、全体としておそらく八葉蓮華形と推測される。その根拠は、円蓋の一例ではあるが、傘蓋頂部に蓮華意匠を施す傘蓋の作例をキジール第101窟壁画において確認することができるからである（図版27）。

なお夢殿の建築が八角円堂と呼称されるように、この八葉蓮華の天蓋も八稜を持つ円蓋ということが出来る。したがって、先述の定義で述べたとおり華蓋と見ることができる。結跏趺坐する如来の背後には光背に線刻された蓮華文の頭光部が見られるが、本尊は直接獅子座に坐し、さらにそれを四脚の方形台座（蓮華文と唐草文を施す）に安置する。この金銅仏は光背頂部に一化仏、本尊両脇に二脇侍、二飛天を伴う形式である。

ちなみに、ここで傘蓋が頭上に懸かる例としてアジャンター石窟第16窟のナンダ出家物語を挙げよう（図版28）。そこでは三段に重なる傘蓋が頭上に翳され説法印で結跏趺坐する仏陀像が検出される。この場合の傘蓋を円蓋と見れば、一重と三重との違いはあるが、まさに石家荘出土の金銅仏像の天蓋の様子とかなり近似するものと考えられる。

3）如意輪観音像付随の天蓋（法隆寺大宝蔵所蔵）

この如意輪観音坐像は、鎌倉期（正嘉三1259年）に顕真の勧めで叡尊が願主となって西大寺で本体の切金文様・持物・光背・台座・天蓋・礼盤座などを修理（新補）したことが判明しているが、きわめて珍しい天蓋を持つ像である。その頭上を飾る八稜形の天蓋は、尊像本体の背後から上に延びた長い柄の先端に付く下向きの竜頭に吊されている。天蓋は八方に吹き返しが付くが、その円蓋の内側の中心には八弁の二重蓮華とその周囲に散華の場面が描かれている*28（図版29）。

井上一稔氏は、この菩薩像について「漂う南方的気分は、恵果和尚の弟子で如意輪瑜伽を誦持して法力を得たと伝えられる弁弘が阿陵国（ジャワ中部の古名）の出身であることを考慮すれば興味深い*29」と言及しているが、この像は檀像（サクラ材）で将来仏と考えられ、時期は唐代（8末9世紀頃）と推測される*30。ちょうど、法隆寺五重塔初層内部安置の舎利塔（図版30）の八角形天蓋の下に舎利が安置されるが、仏典にいう「舎利変じて宝珠となる*31」如く、この如意宝珠を持つ如意輪観音菩薩像も同様に意義深く鄭重に安置されているものと推測することができる。

5．華形（蓮華）

1）龍門石窟蓮華洞大蓮華　北魏　（図版31）

大蓮華は、蓮華洞中央天井に倒置され荘厳される。この形態について、かつて飯田須賀斯氏は「倒蓮華」と指摘したが、その論文中の図版は、天地が誤って逆になって掲載されているのでこの点は注意を要する。

ともあれこの大蓮華の蓋は、蓮華洞の石窟全体を象徴的に照らす光明であり、同時に諸仏の天蓋（華蓋）の役割も担う。先述のように蓮華は光明であり、聖なるものの誕生の源を示すシンボルでもある。このような作例は、アジャンター石窟第2窟（5世紀末6世紀前半）における仏堂主尊の頭上及び前室天井、あるいは同第2窟のパンティカとハリティ夫妻像頭上においても同様の意匠からなる大蓮華が見られるが、それはまさに多様な装飾で満たされた華蓋として飛天を伴って荘厳されている（図版32）。同様にエローラ石窟第32窟（ジャイナ教、9世紀、図版33）2階広間においても大蓮華が荘厳されている。つまり、仏教のみならずジャイナ教においても大蓮華装飾が、まさしく聖なる空間の中心において象徴的に光明の役割を担って設置されており、そこにはきわめて重大な宗教的意図が秘められている。

ちなみに蓮華の光明と蓋との関連ついて、例えば『観無量寿経』宝楼観において、次のように示される。すなわち、

「是の如きの蓮華に八万四千の葉有り。一一の葉の間に各々百億の摩尼珠王有り、以て映飾と為す。一一の摩尼、千の光明を放つ、其の光、蓋の如し、七宝合成して徧(あまね)く地上を覆う。釈迦毗楞伽宝、以て其の台と為す」と記す。ここでは無数の摩尼珠が輝き、その各々から放たれた千の光明が、まるで七宝でできた蓋のようであり、あまねく地上を覆い尽くす荘

厳なる浄土世界が示されている*32。まさに蓮華と摩尼珠と天蓋との緊密な相互関係が窺える。

2）法隆寺五重塔相輪

法隆寺五重塔の露盤・伏鉢・請花は元禄期の改鋳であり、また九輪とその部分の擦管は、保元三（1158）年の改鋳であることが知られるが*33、おそらく九輪の平面の形状は、飛鳥時代当初もこの八葉蓮華形であったものと推測される。図（図版１参照）は、最上部と最下部の二つの相輪の平面の形であるが、九輪ともすべてが八葉形を示す。このように九輪部が、八葉蓮華形の平面を持つ輪相の天蓋を九重に積み上げたものであることは、薬師寺東塔相輪部においても確認される。仏塔相輪部が、蓮華意匠ときわめて緊密な関係にあることは、すでに玉虫厨子霊鷲山浄土図（図版９参照）において検出したように、宝塔相輪部を蓮華で荘厳する表現においても確認された。

3）東大寺法華堂内陣天蓋

天平期の法華堂内陣天蓋は（図版13・34参照）その中心に直径70-80ｃｍほどの大蓮華形を据え、さらに周縁の八方に小形の蓮華（径約20cm）を配置している。その中心から八方に放射する光の軸上に宝相華を付けた天蓋と考えられる*34。また大小の各蓮華は中央に実際の鏡を付けており、まさに文字通り聖なる光明を八方に放つ華蓋と見ることが出来る。

ちなみに光背と台座にも蓮華意匠が見られる点に注目したい。蓮華のもともとの開閉は、太陽の光照作用と密に連動しているが、インドにおいてハス（蓮華）は太陽の象徴であり、また聖なるものの誕生する座でもあった。よって蓮華は、仏陀（仏像）の遍く光り輝く有様を示す役割を担っており、それが光と密接な鏡と直結して荘厳具として採用されていることはきわめて意義深い。さらに敷衍するならば、林氏がすでに指摘したように中国鏡の円心部の四葉形にハス（蓮華）意匠が見られるが、それはまさに鏡が文字通り光り輝くものであり、またその象徴としての含意にも注目する必要がある。

ともかく、上記の法華堂天蓋は、すでに触れたように飯田氏によれば「倒蓮華」と呼称するものであり、とりもなおさず鞏県石窟の格天井部に検出される独特の蓮華文飾り（図版35）とかなり近似する。ただしこれに関して、飯田氏は雲岡石窟の例として挙げているが、実際は雲岡石窟ではなく、鞏県石窟の格天井の蓮華装飾であることは明白である。これは飯田氏の完全な誤認と思われる。よってここで訂正を行う。

なおこの天蓋は、法華堂内陣格天井において、格天井全体を藻井と考えれば、その最も中心となる聖なる位置に大蓮華が三基据えられ荘厳されている状況と見ることができる。実際は不空羂索観音像頭上及び両脇の梵天・帝釈天像上方に各一面が確認され、三面ともほぼ同形で同大であるが、この三面のうち中央の一面は後補で、二面は天平期と考えられる*35。

このような類例として、福山敏男氏は、奈良時代の法華寺天井においてもこの「倒蓮華」

が取り付けられていたことを指摘している*36。

ちなみに法華堂華蓋の形式に近似する例として鎌倉期の興福寺北円堂（八角円堂）の天蓋（図版36）が挙げられる。すなわち、その中央には八葉蓮華が見られるが、そこから放射される光明を示す各三本ずつの漆塗金箔の光線が八方に伸び、その光の箭の途中には漆塗銀箔の鏡板が各一個ずつ付き、また別に天蓋の諸所には飛天・楽器・散華・雲形の彩色板が釘で留められ、大蓮華の周りを囲繞する状態の華麗な構成をなしている*37。ここは先述の『大無量寿経　下』に見える華蓋の様子と近似する場面である。堂内には弥勒如来及び両脇菩薩・無着・世親像の一群が安置されており、これらの群像の頭上を覆う天蓋は、まさに遍く大光明を放ち、その世界を端厳な姿で荘厳する役目を果たしている。

4）中尊寺金色堂・鶴林寺太子堂の天蓋

中尊寺金色堂に伝存する平安後期の天蓋は三面あるが、その中壇（清衡壇）に懸かっていた天蓋（図版21参照）は、その中心となる円相部を桧一材から彫出し、その八方に吹き返し部を取り付けている。中心の八葉には藻文を刻み、その外周と吹き返し部には宝相華文を透かし彫している*38。また基衡壇の天蓋（図版37）の形態は、複弁八葉の蓮華形の中心部、左右相称となる唐草文圏と玉縁を廻した中区、宝相華を透かした周縁部などからなる八稜形である。

一方鶴林寺太子堂には鎌倉前半期の天蓋（図版38）が伝存する。これは本尊釈迦像の頭上の天井に吊られるもので、複弁八葉蓮華形・玉縁・八稜形の吹き返し部宝相華文などにおいて基衡壇の天蓋と一部近似するが、中区には唐草文ではなく連続する霊芝雲形が見られる。

日本においては、この八稜形の祖型は、平安初期の東寺御影堂不動明王像に付随する天蓋（図版39）に求められる。この東寺の作例は、円相中心部に八葉蓮華と円相周縁の吹き返しに八葉宝相華文、その間の圏帯に八菩薩（飛天）を描くものと考えられている*39。

いずれの場合も天蓋の中心部分に八葉蓮華を配置する点が共通している。これも正しく華蓋と呼称すべき作例である。なお、醍醐寺所蔵八稜鏡（図版40／唐末期）において、如意輪観音像頭上の虚空に16弁蓮華形天蓋が線刻されている。しかも主尊・如意輪観音坐像の四方には四天王坐像が囲繞し守護している。

ちなみに中尊寺には、一字金輪坐像に付随する楕円形状の平安期の天蓋がある。その中心に輪郭を楕円状にした複弁八葉の蓮華文を配置し、中区に霊芝雲を浮彫する。また周縁の吹き返し部には、金剛界賢劫部の八供養菩薩を巡らしている*40（図版41）。

いずれにしてもこのような天蓋の実際の荘厳法は、平安時代においては、平等院鳳凰堂や法界寺阿弥陀堂の天蓋（図版42）、あるいは時代は下るが江戸期東寺五重塔初層の四方四仏頭上等に確認される状況とほぼ同一であると考えられる。

Ⅳ　おわりに

以上、いわゆる天蓋（華蓋）については、すでに拙論において諸作例を紹介しながら詳論したように、例えば散華が化して華蓋となるように、蓮華装飾と天蓋が、きわめて密接な関係にあったことを改めて確認することができた。冒頭で述べた法隆寺五重塔相輪においてですら蓮華装飾とは無縁ではなく、むしろインド以来の聖なる蓮華に付随していた吉祥としての象徴的意味、すなわち光明や豊饒や生命の根源などの意味を複合的に込めていたと見るべきであろう。中国古来の蓮華との関係については、さらに深く追究する必要があるものの、インド的・仏教的蓮華装飾と意味や形態の上での近似性・相似性などが認められた。

今回拙論においては、主にインド以来の仏教美術の展開の上に華蓋を位置づけて考究してきたが、華蓋の始まりは、インドと中国のいずれが先か後かの問題ではなく、おそらくそれぞれの国や時代における尊貴・威徳などを表すための基本的な考えが相似していたことが、その共通の一因であろうと推測される。神聖な光明を現出する鏡の中において、崇拝の対象となる尊貴のもの（神・仏・帝）を光輝を意味する蓮華と共存する姿で表現した意図は、各々を同一視（統一）し、より絶大なる遍き光へと昇華させたことを象徴的に物語っている。換言すれば、威光を放つもの（神・仏・帝）を神聖なる蓮華でもって表現乃至荘厳する方法が、光や権威の象徴としての鏡に登場する、いくつかの神聖な存在を具現する場合と酷似していたものと考えられる。

ともあれ、この上なく偉大なものを善美を尽くして荘厳することは深甚なる恭敬の表現であり、まさにそれに相応しい一方法が、華蓋をもっての礼拝供養であった。それがインドにおいて古来象徴的に聖なる光明と豊饒と生命の誕生の源と考えられていた「蓮華」をもって、その荘厳が行われてきた訳である。多種多様な法具と共に華蓋をもって仏を供養することは、仏道を成すことにつながると仏典は説く。ちなみに『妙法蓮華経　方便品第二』において次のように供養と功徳を説いている。すなわち、

「若し人、塔廟の宝像及び画像において　華・香・幡・蓋をもって敬心にして供養し若しくは人をして楽を作さしめ鼓を撃ち、角・貝を吹き簫・笛・琴・箜篌・琵琶・鐃・鈸銅　かくの如き衆の妙音を尽く持って、以て供養し或は歓喜の心を以て歌唄し仏の徳を頌し乃至、一の小音をもってせしも皆、已に仏道を成ぜり*41」と。

また荘厳具としての幡や蓋は、『妙法蓮華経　如来神力品第二十一』において、種々の華・香・瓔珞・厳身の具・珍宝・妙なる物とともに娑婆世界に散ずるものとして示されるが、それらが雲集して宝帳へと変成し、さらに諸仏の上を覆う様が一仏土の如く示されている。ここでは、まさに諸物が雲集しそれが宝の帳に化現し諸仏を遍く覆う状況が、天蓋の別称である雲蓋の如く表現されている。すなわち、

「即時、諸天は虚空の中において高声に唱えて言わく“この無量無辺百千万億阿僧祇の世界を過ぎて国有り、娑婆と名づく。この中に仏有し、釈迦牟尼と名づけたてまつる。今、諸の菩

薩・摩訶薩のために、大乗経の、妙法蓮華・菩薩を教ゆる法・仏に護念せらるるものと名づくるを説きたもう。汝等よ、当に深心に随喜すべし。亦、当に釈迦牟尼仏を礼拝すべし”と。彼の諸の衆生は、虚空の中の声を聞き已りて合掌し、娑婆世界に向いて、かくの如き言を作す“南無釈迦牟尼、南無釈迦牟尼仏”と。種種の華・香・瓔珞・幡・蓋及び諸の厳身の具・珍宝・妙なる物をもって、皆共に遙かに娑婆世界に散ず。散ずる所の諸の物は、十方より来ること、喩えば雲の集まるが如し。変じて宝の帳と成りて遍く此間の諸仏の上に覆う。于時、十方世界は通達無礙なること、一仏土の如し[*42]」と。

このように種々の散ずる所の物は、まさに雲の如く諸方より来集し、摩訶不思議な化現が立ち現れる。その時、まさに十方は仏国土となる。

そもそも、仏教美術上の天蓋は、その歴史の展開したいくつもの時代や場所において、多種多様な造形表現がなされてきた。一方漢訳仏典では「蓋」「繒蓋」「傘蓋」「幡蓋」「華蓋」「宝蓋」などと多様な表記が検出される。その中には、例えば文字の上では幡と蓋が区分されずに「幡蓋」と記される場合と「幡」と「蓋」の二項に明確に分けられて記される場合もある。ちなみに日本は、百済から仏教が伝来した際に「幡蓋」が献じられているが、『日本書紀　巻第十九【欽明天皇の條】』の仏教公伝に関わる記事に確認されるように、まさしく仏像と幡蓋と経論は、仏教儀礼に必須の法具であったことが判明する。すなわち、

「(前略) 冬十月に、百済の聖明王、更の名は聖王。西部姫氏達率怒斯致契等を遣して、釈迦仏の金銅像一躯・幡蓋若干・経論若干巻を献る (後略) [*43]」とある (傍点筆者)。

以上、顧みれば拙論においては、主に仏教美術上の天蓋としての華蓋に焦点を当てながら言及してきた訳であるが、今回は華蓋の多様なあり方のその一端について、いくつかの疑問を解きながら多少の卑見を開陳したに過ぎない。いずれまた、別の角度から改めてこの華蓋について論究を試みるつもりである。もしや拙論において何らかの誤解や疎漏があるかも知れない。博雅の士のご叱正を望みつつ擱筆致したい。

註

＊1　小杉一雄『中国仏教美術の研究』新樹社　昭和55年　76-77頁。

＊2　中村元・久野健『仏教事典』東京書籍　平成14年　359頁。

＊3　フランシーヌ・ティッソ（前田耕作訳）『図説ガンダーラ　―異文化交流地域の生活と風俗―』東京美術　1993年　54-56頁。フランシーヌ・ティッソは、この塔の場合、傘蓋の柄が蓮華で飾られ、その花弁は第一の傘蓋の縁まで拡がっていることを指摘し、またこの他にも伏鉢部に蓮華装飾を施す奉献塔の作例を数例挙げている。

＊4　中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木美士『仏教辞典』岩波書店　2002年　753頁。

＊5　例えば華蓋の化現について次のように説く。すなわち「(前略) 是諸菩薩以法供養。皆各散花。奉事貢上密迹金剛力士。其所散花化成花蓋。承仏威神。是諸花蓋一切咸来。在於仏所（中略）又其宝蓋住虚空中。当於仏上従宝蓋。出如是比好妙音声（後略)」『大宝積経』第十一密迹金剛力士会大正新修大蔵経第11巻　上中段　60頁。以下「大正新修大蔵経」を「大」とし第11巻を「11」と表記する例にならう。註18参照。

＊6　塔の正確な建立年代は明らかではないが、通説に従い金堂の様式が平安と見られることから9世紀半ば過ぎに建立されたものと推測される。天承元（1131）年の修理記録があり、その頃塔も修造されたものと考えられる。太田博太郎編集責任『日本建築史基礎資料集成　十一　塔婆Ⅰ』中央公論美術出版社　昭和59年　29頁参照。なお宝蓋と九輪の間に宝瓶が確認されるが、杉本卓洲氏の研究に倣えば、例えばこれを「水瓶」と見なした場合、インド古代彫刻に散見されるいわゆる「プールナ・ガタ」と呼称される「水瓶」と同様の意味を担っているものと推測される。具体的には、インドのナーガールジュナコンダ仏塔彫刻（3-4世紀）の例では、その瓶（壺）の口から植物、特に蓮華が繁茂している場合が検出される。これはインドの吉祥のシンボルの最も一般的な例であり、豊饒・生産の力を示すものと考えられ、換言すれば生命のシンボルであり、あらゆるもの生み出す生殖力として機能していることを示している。この機能と同様のことは、アマラーヴァティー仏塔彫刻の例においても、平頭（ハルミカー）から傘があたかも蓮の葉の如く幾重にも出ていることが判明するが、これについて杉本氏は「仏塔」が「プールナ・ガタ」と同一視されていること、さらにはヒンドゥー寺院シカラ上の蓮華形の尖塔（ストゥーピ）先端にクンバあるいはカラシャと呼ぶ「水瓶」が安置されていることなどを挙げて言及している。杉本卓洲『インド仏塔の研究』平楽寺書房　1984年　75-76頁参照。

＊7　創建以来の修理について以下のような年代が知られる。治安三（1023)、天養元（1144）年または久安三（1147）年、仁平二（1152）年、永万元（1165）年、建久四（1193）年、寛喜二（1230）年（再建、天平以来の大改変)、文暦二（1235）年、文和三（1354）年、延文二（1357）年、永徳三（1383)、慶長年間（1596-1614)、元禄九（1696）年、昭和十二（1937）年（奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観　第五巻　法隆寺五』岩波書店　1980年　9-12頁参照)。前掲『法隆寺五』は、露盤上の形態について、頂には地盤・反花・蓮華・花実・宝瓶・天蓋・宝珠・

光明からなる青銅製の華麗な「宝形」を載せていると言及している。なお露盤上の宝形は、創建期の様式を伝えているものと推測される。以下、奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観　第五巻　法隆寺五』を『六大寺大観　五　法隆寺五』と省略表記する例にならう。

＊8　林巳奈夫「中国における蓮の花の象徴」(『東方学報第59冊』京都大学人文科学研究所) 1987年。林氏は、この鏡の年代について本文中で前3世紀とするが、一方挿図説明文では3世紀としている。筆者が検討して見た結果、後者の3世紀が正しいものと考えられる。

＊9　小杉『前掲書』127頁。

＊10　小杉『同書』128頁。

＊11　白川静『字統』平凡社　1984年　48頁。

＊12　鎌田正・米山寅太郎『漢語林』大修館書店　平成6年　886頁。

＊13　祖布川寛『崑崙山への昇仙』中央公論社　昭和56年　86頁。氏は以下のように記す。つまり『楚辞九歌　小司命』の中で「孔蓋と翠旃（＝旌）と九天に登りて彗星を撫す」ことを指摘し、さらに『漢書王莽伝』を挙げて「或る人云えらく、黄帝　時に華蓋を建て登僊すと。莽乃ち華蓋の九重なるを造り、高さ八丈一尺、金瑵羽葆（車蓋の羽飾）あり」と言及したが、前者は孔雀の羽で龍車の蓋を飾り、後者は九層に作ったうえに、黄金の蓋頭や鳥の羽のおおいで飾ったことが知れる。括弧（　）内は筆者補足。

＊14　小杉『前掲書』127頁。

＊15　飯田須賀斯「三月堂の所謂天蓋は天井の倒蓮華ならん」(『日本建築学会研究報告第22号』日本建築学会) 昭和22年。

＊16　林「前掲論文」1987年、及び上原真人『日本の美術　№359　蓮華紋』至文堂　1996年　30頁。

＊17　吉村怜「雲崗における蓮華装飾の意義」(『中国仏教図像の研究』東方書店) 昭和58年。この他に収録された蓮華化生に関する一連の論文参照。

＊18　『大無量寿経　下』は次の著作を参照した。高木昭良『浄土三部経の意訳と解説』(永田文昌堂昭和55年) 323頁。

＊19　高木『同書』324頁。

＊20　高木『同書』302頁。

＊21　関根俊一『日本の美術10　№281　仏・菩薩と堂内の荘厳』至文堂　1989年　43頁。

＊22　小杉『前掲書』151頁。

＊23　法隆寺金堂釈迦像天蓋の格間には六弁の蓮華、一方橘夫人厨子天蓋の格間には重弁五弁の宝華文が認められる。いずれも蓮華をモティーフとする装飾と考えられる。『六大寺大観　二　法隆寺二』岩波書店　1968年　解説45頁。及び『六大寺大観　五　法隆寺五』岩波書店　1980年　解説50頁参照。

＊24　敦煌文物研究所編・中国石窟・敦煌莫高窟編集委員会監修『中国石窟　敦煌莫高窟　第3巻』平凡社　1981年　254頁。

＊25　[監修] 大沼淳・樊錦詩『敦煌石窟4　莫高窟第420・419窟』文化学園・文化出版局　2001年

193-196頁。

*26 『六大寺大観　四　法隆寺四』岩波書店　1980年　解説20-23頁。

*27 小杉『前掲書』79頁。なお神仙像に付随する傘蓋の縁に垂飾を付けた作例が、前漢の山東省済南博仏館蔵の「人を乗せた神鳥（陶製）」にも確認される。稲畑耕三郎監修・劉煒編著・伊東晋太郎訳『図説中国文明史　秦漢　雄偉なる文明』創元社　2005年　254頁参照。

*28 『六大寺大観　四　法隆寺四』解説61頁。及び『法隆寺昭和資材帳　第12巻』小学館　1993年　55頁参照。なお後者の図書において、法隆寺にはこの種の竜頭が数例あるが、天蓋・幡などを吊したり懸けたりする法具として使用されたものと推測される。

*29 井上一稔『日本の美術　No.312』至文堂　1992年　1頁　第1図解説参照。

*30 『六大寺大観　四　法隆寺四』解説61頁。

*31 「舎利即如意宝珠」の関係は諸仏典に確認されるが以下に二三の例を示す。「（前略）如意珠出自仏舎利。若法没尽時。諸舎利皆変為如意珠（後略）」『大智度論』大25　134頁上。「（前略）此舎利変為摩尼如意宝珠（後略）」『無量寿経優婆提舎願生偈註』大10　836頁中。「此宝亦名如意珠。常出一切宝物（中略）。諸過去久遠仏舎利、法既滅尽変、成此珠以為利益（後略）」『経律異相』大53　14頁上。

*32 髙木『前掲書』467頁

*33 『六大寺大観　一　法隆寺一』1981年　解説31-32頁。

*34 『六大寺大観　十　東大寺二』1979年　解説27頁。

*35 同上。

*36 福山敏男『日本建築史の研究』桑名文星堂　昭和18年　260頁。

*37 『六大寺大観　七　興福寺一』岩波書店　1979年　解説24頁。

*38 工藤圭章・西川新次『日本の美術11　平等院と藤原彫刻』小学館　昭和47年　114-115頁。

*39 円圏帯中の八躯の飛天について関根俊一氏は、四摂菩薩と四天女とするが、一方伊東史朗氏は金剛界曼荼羅の内供養（金剛嬉・金剛鬘・金剛歌・金剛舞）と外供養（金剛香・金剛華・金剛燈・金剛塗）の八供養菩薩とする。なお飛天について夙に水野敬三郎氏も伊東氏同様の金剛界内外八供養菩薩と見ている。

関根俊一『日本の美術No.281　仏・菩薩と堂内の荘厳』至文堂　1989年　44頁。伊東史朗「不動明王坐像・天蓋」（『週刊朝日百科　日本の国宝　67　京都教王護国寺（東寺）3　観智院』朝日新聞社　1998年　7-214頁）参照。水野敬三郎「附　天蓋」（『日本彫刻史基礎資料集成　平安時代　重要作品篇　四』中央公論美術出版社）昭和57年　44-49頁参照。

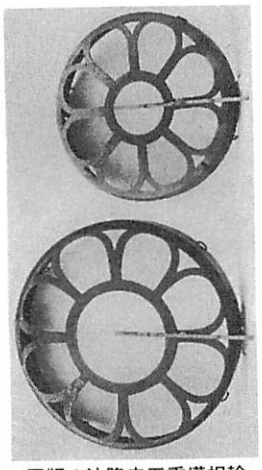
*40 前掲『日本の美術　No.281　仏・菩薩と堂内の荘厳』45頁。

*41 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経上巻』岩波書店　1977年　116頁。

*42 同書『下巻』1976年　156-158頁。

*43 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系68　日本書紀　下』岩波書店　昭和49年　100頁。

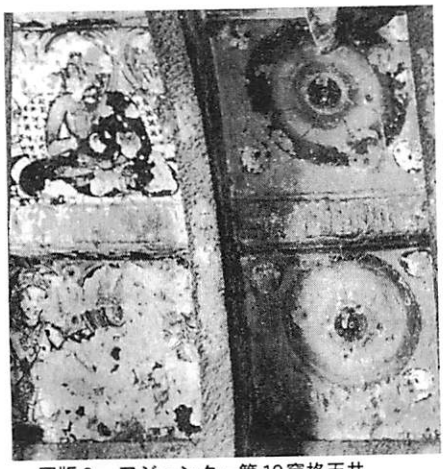
図版



図版１法隆寺五重塔相輪

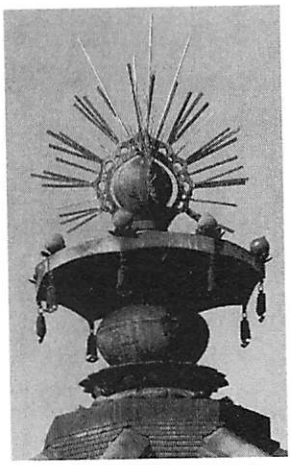
図版２①　ローリヤーン・タンガイ出土ストゥーパ全体

図版２①　同ストゥーパ傘蓋部分



図版３　アジャンター第10窟格天井「蓮華と仏像」

図版４　室生寺五重塔相輪

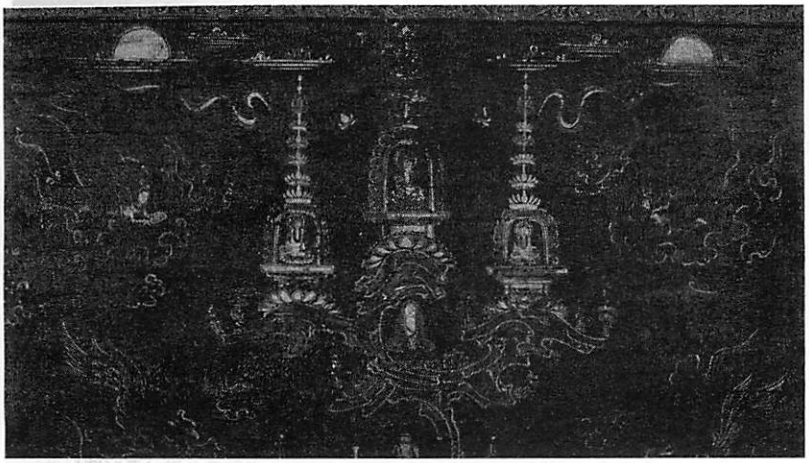


図版５　夢殿露盤部「宝形」

図版６　敦煌西千仏洞第18窟窟頂南面「説法図と千仏」

図版７　岡山県苫田郡鏡野町観音山古墳出土
平縁半円方形帯神獣画像鏡
（描き起こし図）華蓋

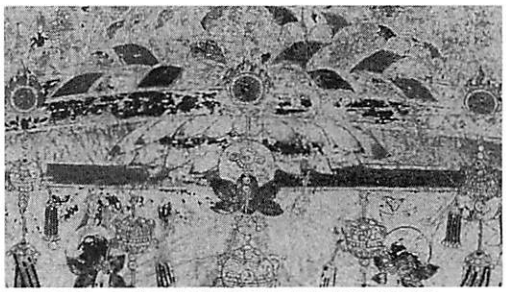
図版８　三段式神仙鏡「華蓋」



図版９①　玉虫厨子霊鷲山浄土中宝塔

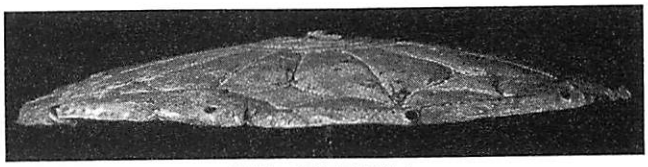
図版９②宝塔拡大図

図版10①　法隆寺金堂壁画第６号壁描き起こし図



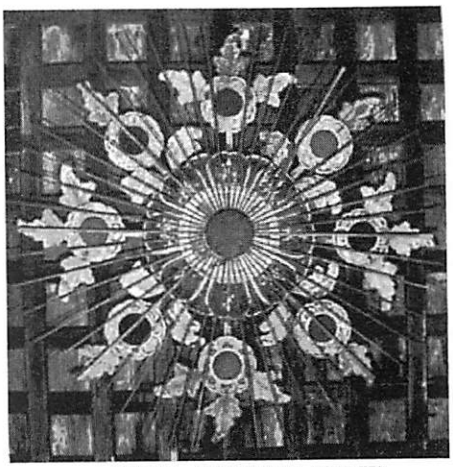
図版10②　法隆寺金堂壁画第６号壁阿弥陀天蓋
拡大

図版 11①　石家荘出土金銅仏 十六国時代

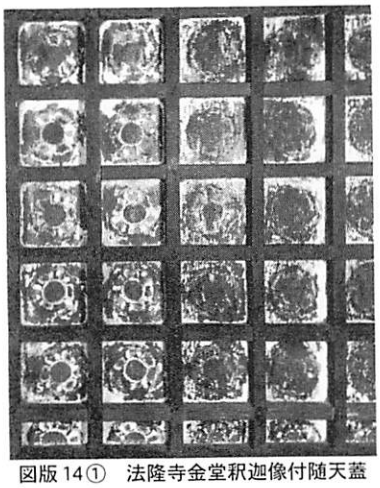


図版 11②同天蓋拡大

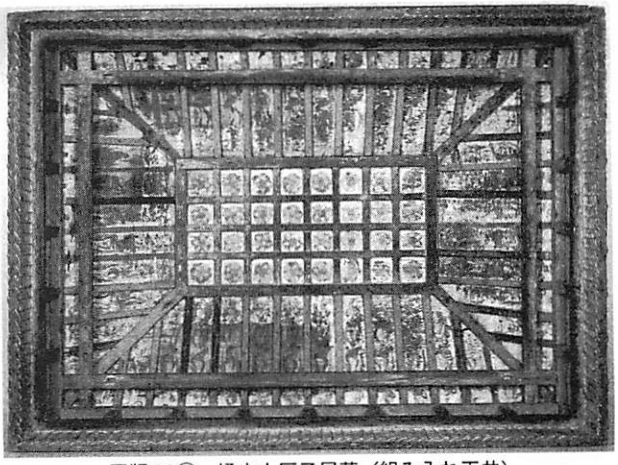
図版 12　マトゥーラ・バラ比丘奉献仏付随傘蓋（2 世紀）



図版 13　法華堂天蓋（東の間）

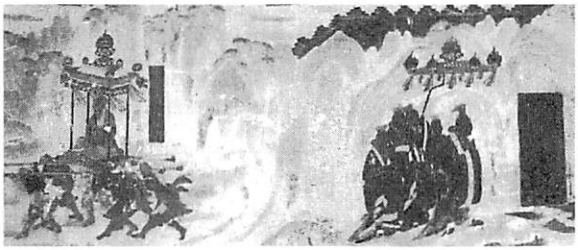


図版 14①　法隆寺金堂釈迦像付随天蓋

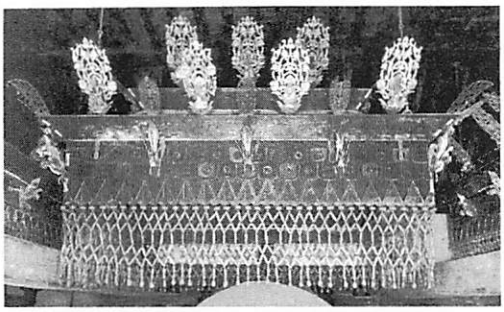


図版 14②　橘夫人厨子屋蓋（組み入れ天井）

図版15①　相輪・傘蓋・頂肩輿　敦煌 第323窟
初唐



図版15②　同傘蓋・頂肩輿部分拡大

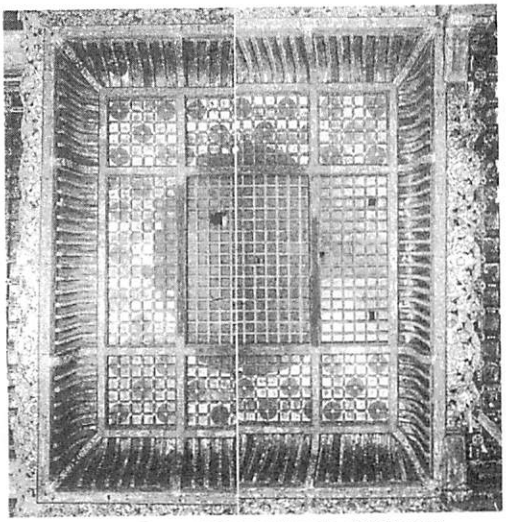


図版16　法隆寺金堂釈迦像頭上　箱形天蓋

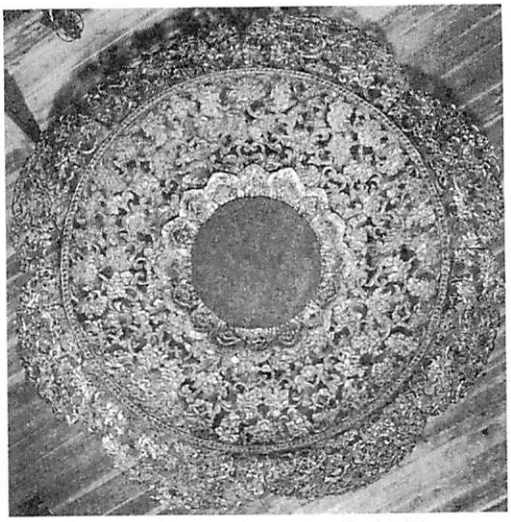
図版17　文殊師利菩薩・普賢菩薩両尊の頭上天蓋

図版18　「群獣聴法図」敦煌　隋420窟
牀帳系仏座（箱形天蓋）

図版19　雲岡第9窟南壁東側　箱形天蓋

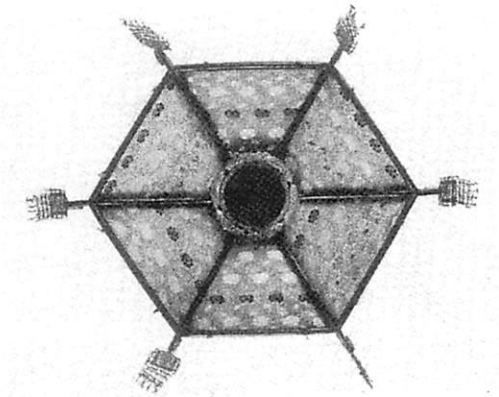


図版20①　平等院鳳凰堂天蓋（箱形天蓋）

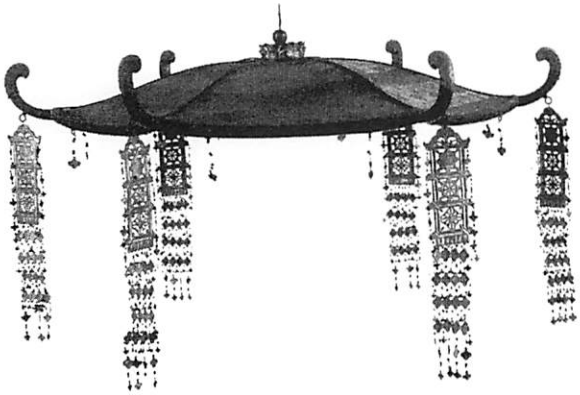


図版20②　平等院鳳凰堂天蓋（円蓋）

図版21 中尊寺清衡壇天蓋

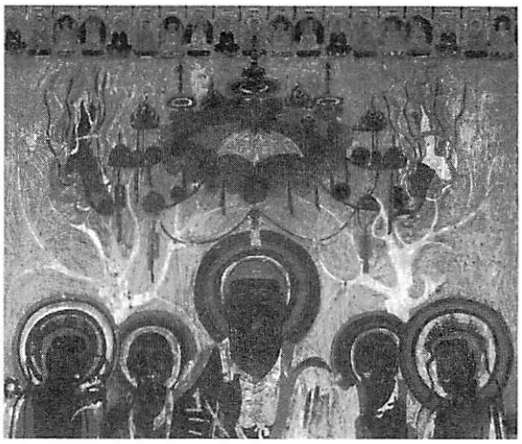


図版22①　法隆寺聖霊院中央厨子内
・聖徳太子頭上天蓋（真下から）



図版22②　法隆寺聖霊院聖徳太子頭上天蓋（真横から）

図版23 炳霊寺石窟　第169窟

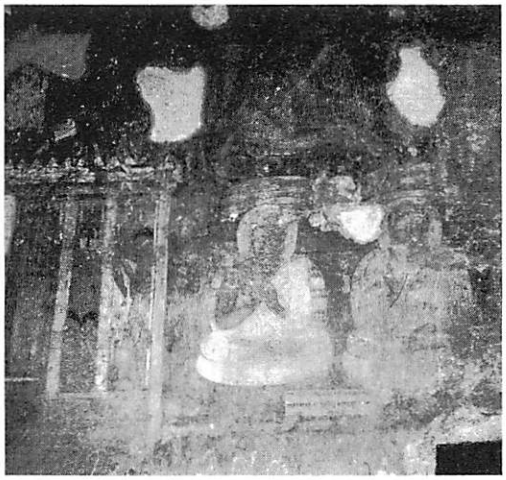


図版24　敦煌石窟　第311窟（隋）北壁中央

図版25　敦煌西千仏洞第18窟
南壁西側・不空羂索観音（唐）

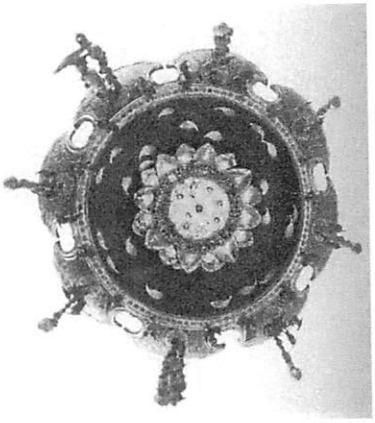
図版26　ストゥーパ型舎利容器
ガンダーラ（5-7世紀頃）

図版27　キジール石　第101窟
主室窟頂左

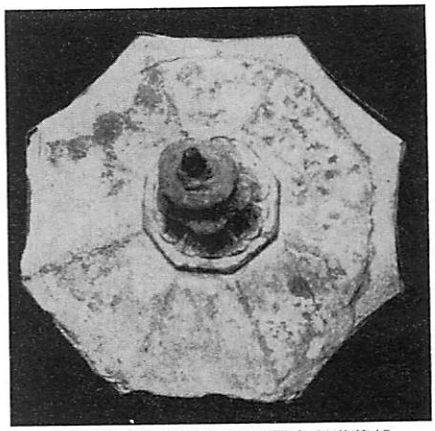


図版28　アジャンター石窟　第16窟
「ナンダ出家物語」左廊

図版29①
法隆寺大宝蔵
如意輪観音坐像



図版29②如意輪観音像天蓋

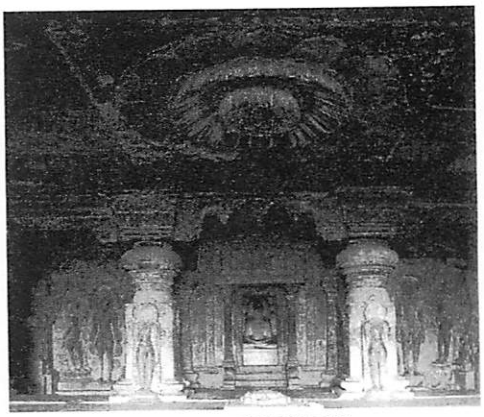


図版30 法隆寺五重塔初層舎利塔蓋部

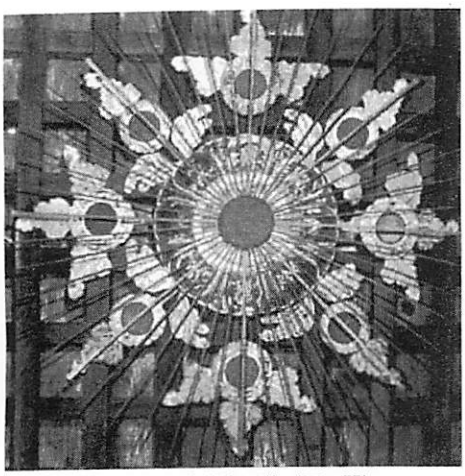
図版31　龍門石窟蓮華洞 北魏

図版32①　アジャンター第2窟
仏堂主尊の頭上天蓋

図版32②　アジャンター第2窟
パンティカとハリティ夫妻像頭上天蓋

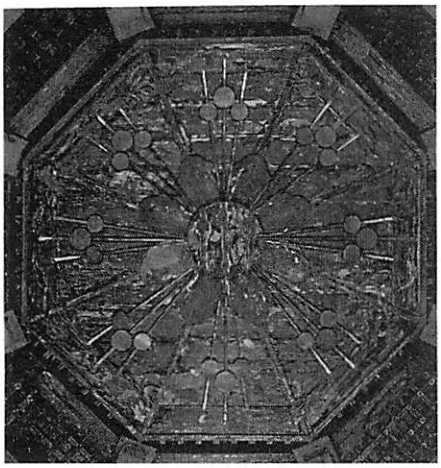


図版33　エローラ石窟第32窟
（ジャイナ教）

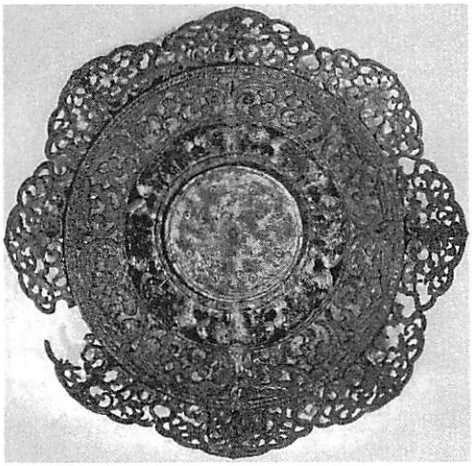


図版34　法華堂天蓋（西の間）

図版35　鞏県石窟　第1窟天井（東北隅）



図版36　興福寺北円堂天蓋

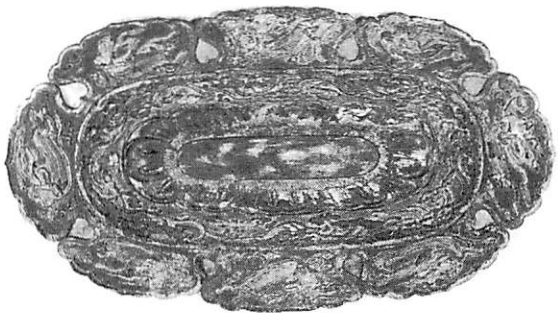


図版37　金色堂 基衡檀天蓋

図版38　鶴林寺太子堂天蓋

図版39　東寺御影堂不動明王坐像天蓋

図版40　醍醐寺所蔵八稜鏡（唐）



図版41　中尊寺一字金輪坐像付随楕円形状天蓋（平安）

図版42　法界寺阿弥陀堂天蓋

【挿図・図版出典】

挿図１　中村元・久野健監修『仏教事典』東京書籍　平成14年　526頁

図版１　天沼俊一『日本建築史図録　飛鳥・奈良・平安』東京堂出版　平成８年
図版２①②　上野照夫編『世界の美術館32　カルカッタ美術館』講談社　1970年
図版３　高楠順次郎・和田三造・熊谷国造共編『印度仏跡実写』巧芸社　大正14年
図版４　天沼『前掲書』
図版５　奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観　第五巻　法隆寺　五』岩波書店 1980年
図版６　敦煌研究院編『中国石窟　安西榆林窟』平凡社　1990年
図版７　『東方学報第59冊』京都大学人文科学研究所　1987年
図版８　樋口隆康編集『中国美術　第四巻　銅器・玉』講談社　昭和48年
図版９①②　前掲『奈良六大寺大観　第五巻　法隆寺　五』
図版10①　春山武松『蛍光燈下の壁画』いかるが舎　昭和24年
図版10②　監修・法隆寺　朝日新聞社編『法隆寺再現壁画』朝日新聞社　1995年
図版11①②　監修・曽布川寛・出川哲朗『美の十字路』大広　2005年（図録）
図版12　『美術研究所資料集第七輯　印度及南部アジア美術資料』美術研究所　昭和14年
図版13　前掲『奈良六大寺大観　第十巻　東大寺　五』岩波書店　1979年
図版14①　前掲『奈良六大寺大観　第二巻　法隆寺　二』岩波書店　1968年
図版14②　法隆寺昭和資材帳編集委員会編『法隆寺の至宝－昭和資材帳12－』小学館　1993年
図版15①　敦煌文物研究所編『中国石窟　敦煌莫高窟　第３巻』平凡社　1981年
図版15②　同上『中国石窟　敦煌莫高窟　第３巻』
図版16　前掲『奈良六大寺大観　第二巻　法隆寺　二』
図版17　大英博物館監修『西域美術１　大英博物館スタイン・コレクション　敦煌絵画Ｉ』講談社　昭和57年
図版18　大沼淳・樊錦詩監修『敦煌石窟４　莫高窟隋420・419窟』文化学園・文化出版局　2001年
図版19　前掲『中国石窟　雲岡石窟第２巻』平凡社　1990年
図版20①②『平等院大観　第二巻　彫刻』岩波書店　1987年
図版21　工藤圭章・西川新次『日本の美術11　平等院と藤原彫刻』小学館　昭和47年
図版22①②　法隆寺昭和資材帳編集委員会編『法隆寺の至宝－昭和資材帳12－』小学館　1993年
図版23　甘粛省文物工作隊・炳霊寺文物保管所編『中国石窟　炳霊寺石窟』平凡社　1986年
図版24　前掲『中国石窟　敦煌莫高窟　第２巻』平凡社　1981年
図版25　敦煌研究院編『中国石窟 安西榆林窟』平凡社　1990年
図版26　樋口隆康監修『パキスタン・ガンダーラ美術展』日本放送協会　1984年

図版27　新疆ウィグル自治区文物管理員会・拝城県キジル千仏洞文物保管所編『中国石窟キジル石窟　第2巻』平凡社　1984年

図版28　町田甲一・福田徳郎『アジャンター石窟寺院』朝日新聞社　1987年

図版29①　前掲『奈良六大寺大観　第四巻　法隆寺四』岩波書店　1980年

図版29②　前掲『法隆寺の至宝－昭和資材帳12－』小学館　1993年

図版30　天沼『前掲書』

図版31　筆者撮影　1981年

図版32①　前掲『アジャンター石窟寺院』

図版32②　筆者撮影

図版33　『週刊ユネスコ世界遺産№.83　アジャンター石窟寺院群　エローラの石窟群』講談社　平成14年

図版34　『奈良六大寺大観　第十巻　東大寺二』岩波書店　1979年

図版35　河南省文物研究所編『中国石窟　鞏県石窟　』平凡社　1983年

図版36　前掲『奈良六大寺大観　第七巻　興福寺一』岩波書店　1979年

図版37・38　関根俊一『日本の美術№.281　仏・菩薩と堂内の荘厳』至文堂　1989年

図版39　倉田文作『原色日本の美術　第5巻　密教寺院と貞観彫刻』小学館　昭和45年

図版40　井上一稔『日本の美術№.312　如意輪観音像・馬頭観音像』至文堂　1992年

図版41　関根『前掲書』

図版42　福山敏男『日本の美術9　平等院と中尊寺』平凡社　昭和44年